

琉球大学学術リポジトリ

3. 小学4年生を対象とする事例 ーワークショップー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 島袋純 公開日: 2012-08-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 呉我知, 浩 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/25058

4 学年担当教諭へのインタビュー

聞き手：島袋純（教育学部教授）、島袋裕介（教育学部4年次）、大宜見洋文（沖縄自治研究会メンバー）

島袋：NPOの方々のお話を聞きして、それで学生の中からも、NPOの方々主体だったんで、先生方がどうやって動いているのか、どうやって関わっているのかっていうのが見えてこないっていうことがあってですね、それで横山先生に先生方に聞き取りをしたいとお願いしました。それで分かったことは各学年全部違うっていうか、かなり違うっていうのが分かりまして、それで学年毎に話を伺ったほうがいいかなと思って、質問の機会を設定させていただきました。4年生を担当した宮良さんの話を聞くと、かなりの部分の授業をアースの会が担当しているということでした。6年生の先生方に話を聞いたら、6年生の先生方がほとんど中心にいろいろ動いている姿が見えてきました。一番気にしているのは、環境教育って新しい授業なので、普通の教科の場合はもう教えること、やるべきことが決まっていて、年次の事前に計画つくる時に、その教科の内容に沿ってつくればいいわけですね。ところが、これに関しては授業の組み立て、計画づくりとか内容のつくりに関しても、こう試行錯誤しながらやっている様子が見えるんです。その中で、どういうつくり方して、先生方がどう関わって、それからNPOの方々がどういう役割を果たしているかってところが、一番お聞きしたいんですが。

教諭A：わかりました。4年生は、社会科の教科で「ゴミのゆくえ」という単元で、ゴミの処理のされ方、リサイクルセンターの働き、リサイクルについて、クリーンセンターの働き、等について学習をして、他の学校でもそこでいちおう終わるんですね。だけど、本校は環境教育に取り組んでいるので、4年はそれを少し延長線上にもって行って、ゴミを減らそうまで、「ゴミのゆくえ」ではなくて、総合にも繋げて、ゴミを減らす活動をしていこうということで、生活の中で実践していけるようにしようと。実践のほうまでもっていくような、延長線上に目標をもっています。それで、社会科の授業に沿って行っています。総合につなげてNPOの方をお呼びして、例えば9月に「買い物ゲーム」という環境プログラム、古我知さん達（沖縄リサイクル運動市民の会）が立ち上げているこのプログラムを使って、一回保護者と教師が勉強会をNPOの方にしてもらって、それから今度は教師と保護者が子ども達に伝えるっていう役割をやって、それを実践して生活の中で特に大きな買い物、ゴミが出る最初の段階というか、その役割について、買い物を通してのゴミの減らし方について勉強していくんです。そこから始まって、最後にはもう一度振り返りで2学期のほうにまたNPOの方をお呼びして、何か今までの学習の振り返りをまとめてくださったり、ゴミの現状をスライドで見せていただいたりです。あと、風呂敷の使い方とか、いろんな人の知恵、こうマイお箸を持っていくとか、いろんな実践をみんなに紹介していただいて、それでまとめをする感じです。

島袋：普通の教科の授業だと、授業を担当される先生が指導案をつくって、それに沿った授業をやって、そして指導案と授業の内容とを比較して何ができたか、何ができなかったかっていう自分なりの反省をして、公開授業だったらみんなで反省するってなるんですけど。こういった授業に関しては、何ていうか、NPOの方々が授業を担当されるとしても小学校の先生ではないので、

訓練受けていないわけですよ、それなりに授業は、アースの会の宮良さんは上手くなっているというふうにおっしゃっていましたが。研修活動もされていると思うのですが、指導案等はたぶん作ってないでしょうし、それから教育目的、目標とか、単元の目的だとか、それが何ていうか、先生方とどこまで今日はどうやって、どういう目標でその授業を設定していて、それがちゃんとできているかどうかというのを事後的にまた検証しながら、お互いに話し合っ、授業を一步一步進めていくというのがたぶん理想像ではあると思うんですけども、そこまではいけている様子があまり見えないんですが。

教諭 A：そうですね。そこはもしかしたら課題かもしれないですね。いちおうプログラム自体がもともとシナリオとして一冊の本にまとめられていて、それを見ながら教師達は実践しているのですが、本当はそこをそのまま流すんじゃなくて、私達のほうで一回検討したり、教育現場で、教育課程の中での目標を立てたりして、自分達でオリジナルに変えていかないとはいけないか、なっているのはちょっと課題かなって思っています。

島袋：NPOの方々は指導案のシナリオっていうのを持っていらっしゃるんですか。

教諭 A：そうですね。シナリオ、プログラムの流れっていう形で、それが授業の始まり・中・終わりって感じでシナリオとして私達に提供してくださっているんですよ。このシナリオは学校で実践しても、子ども達の実態を見ながら実践しないといけないので、シナリオ通りにはいかないというか。瞬時の教師の判断力とか、まとめていく力がすごく必要ですけど。

島袋：こういった、その非定型的な、しかもゴールがよく分からない、特に子ども達の自発性中心にしてグループ学習でやっていくと、段取り通りにほとんど進まなくて、答えも予想つかない答えが出てきますよね。それこそが、面白いと思うんですけども。それに対して教員の側がどう対応するかっていう力は日本の教育システムの中で、私は教育学部の教員ですが、教育学部にはないですし、どこにもないじゃないですか。そういった力を身につけるということは、実際にはどうやってできてるのですか。宇栄原小学校ではどうやって先生達の力を引き上げているのですか。

教諭 A：なんか自信がないですが、やっぱり事前の勉強会で不安とかそういうつまずきそうなところとか、自分達のクラスの実態を話しています。こんな時どうするっていうこと等をいちおう事前にミーティングで意見交換をしたりするんですね。

島袋：ミーティングというと誰と誰ですか。

教諭 A：私とNPO。NPOの方に一回私達が授業を受けるんですよ、家庭科室の空き教室で受けさせてもらって、その時に自分達が授業をする時にこんなふうになったらどうしようとか、こんな意見が出てきたらどうしようとか、最初に事前学習というか、意見交換はあるんですね。

島袋：これは最初に一回ですか。

教諭 A：はい、そうです。進めていく前に一回学習会をもって、結局教師がやるんですけど、いっぱい反省も出てきますし、NPOの方がたくさん関わってくれるんですけど、全て主体的にやってもらわなくて、私達の中でも、地域清掃してみようか、とか。去年は牛乳パックについて深く追求して。牛乳パックのリサイクルがどうやっていくかとか、そのリサイクルされていく過程を調べて発表したりとか、お互いで意見発表、調べてきたことを発表したりして学習を深めていったんですね。

島袋：分かりました。

島袋（裕）：先ほど買い物ゲームの話があったんですけど、この前古我知さんの買い物ゲームのセミナーみたいなものを受けたんですけど、あれいろいろポジションというか、あるじゃないですか。メインの進行役やグループに入っていってヒントを与えていく補助スタッフみたいな形とか。教員の方はどのポジションですか。

教諭 A：黒板の前に立ってメインで。

島袋（裕）：地域の父母の方もスタッフで入ったりしますか。

教諭 A：はい。一回学習会の時に、お知らせを保護者にも流して、4年生でも学習しているので、保護者もゴミについて、一緒に勉強しませんかっていうふうに募集しました。そしたら、この勉強会の時にやっぱり関心の強いお母さん達は一緒に学習会に参加してくれるんですね。その学習会に参加してもらった保護者は、当日の買い物ゲームをする時はスタッフとして手伝ってもらいながら、また授業参観日にあてるので、参加できなかった保護者もどうやって授業を進めているんだっていうふうに、保護者に参加していただくような感じで日にちを設定して、実践しています。クリーンセンターにも何人か行きましたね。クリーンセンターに行く時も、普段は社会科見学として、それで子ども達を引率して終わりなんですけど、保護者にも「行きますよ。希望される方は一緒にどうぞ」ということで、保護者にもこう流す形で。

島袋（裕）：この前のですよね。2人ぐらいいましたよね。

教諭 A：はい、そうです。

大宜見：父母と一緒に授業に参加することに対しては、抵抗とかはないですか。ストレスになりそうな気がするんですが。

教諭 A：もう慣れましたね。ここは、出入りが多いというか、そういう体制の学校で、開かれたといえば開かれているし、慣れですね。あんまり構えてはいないです、失敗してもいいかなって。

逆に開き直って、そこから生まれるものも大きいだろうし。

教諭 B：準備しているところも見せちゃえて感じですよ。

島袋：そうですか。グループ学習進めると、活発な議論が出るのはいいんですけど、時々だけたり、勝手に立って席を動いたりとかあるじゃないですか。

教諭 A：はい、その時はバンバンやります。でも、本当に生の現場っていうか、ありのままを見せるほうがやっぱりいいかなと思って、普段から水泳学習から何から外部の人たちにいろいろ入っていただいています。

島袋：今までのタイプの授業と違って、普通は先生方が知識を持っていて一方的に生徒を座らせて教え込むっていう授業が普通じゃないですか。環境教育に関しては、グループ学習が中心で、子ども達の発案とか、自分達の自主性ですとか、そういったことを重視して、先生方はファシリテーションっていう役割をやりますよね。だけど、このファシリテーションっていう役割って身につけるのは難しくて。最初に、こういう授業でやるよって言われてもできないじゃないですか。それを習得するにはどんなことをやってきたか、あるいはどんなことしたらそういった力が身についていくんでしょうね。

教諭 A：力ね。そうですね。でも、本当にいきなり総合から入ってしまうと、子ども達の活動も、上手いかないし、そういう知識も私達もつけきれないので、まずは単元、社会科の教科のほうから先に入って、見学をして関心を持たせて、環境づくりからしておいて、囲みをつくっておいてそこに追い込み漁ですよ。そこで、子ども達に知識を持たせてく。地域に落書きがあったね、これイヤだね、じゃあどうするみたいな感じで。じゃあみんなで消しに行こうとか、ちょっとずつちょっとずつ、こう追い込んで。

島袋：教科との繋がりですね、これを基盤にして。これはいい考えですね、なるほど。

教諭 A：やっぱり耕しておかないとね。そこでいきなり、さあどうぞ、って言われてもできないと思うので。

島袋：そうすると、先生方も授業を組み立てやすくなるわけですね。自身でも納得しやすいっていうか。

教諭 A：細かい年計は立ててないですけど、流れとして社会科のゴミを早く見学させてみて、9月からそういうゴミの発展授業というか、学習をしていこうっていうことを目安としてもって、どうしても先にこれはできないんですね。

島袋：なるほどね。普通だったら、小学校4年生の社会科で、どれぐらいの時間がゴミの授業が

あてられていますか。

教諭 A：そうですね、普通でしたら 10 時間～12 時間ぐらいですね。もうちょっとゆっくりですね。

島袋：これは、例えばゴミが環境に対する負荷を与えるっていうことで、理科でも何か似たようなものがありそうなんですけど、理科にはないですか？

教諭 A：理科ではないです。

島袋：教科と何かこう関連づけてできるのは、社会だけですか。

教諭 A：社会だけですね。校長先生から聞いていると思うんですけど、もう子ども達は給食で飲んだら牛乳パックをパッパッパって開いて、上手に手で開いて、普通にリサイクル棚に入れるのは習慣化されていて、子ども達にも節電、節水は毎日呼びかけているので、コップにお水入れて歯磨きもする。

島袋：なんですか、節水率・節電率見ましたけどすごい勢いで減っていつているらしいですね。

教諭 A：1 年生からの積み重ねがあって、生活の中で少しずつやってきて、ゴミの学習をして、そこから自分達の家庭での生活はどんなだろう、みたいな感じで。深めていけるような感じです。

島袋：これは、先生方にとっては環境教育をやったことによって、例えば自分自身の教育スタイルが変わるという影響もあったりするんですか。それと、宇栄原小学校から別の学校に行った後はどういった状況になるのかな、っていうことに興味があるんですが。

教諭 A：移ったことないからねえ。でも、他の学校で 4 年生を教えて、同じように今 4 年生を教えていて、けっこう子ども達のほうが 1 年生からの積み重ねがあって、マメに意識が身についていて、私がたまたま水を流しっぱなしで何かの作業をしている時に、先生ダメでしょ、と怒られたので、ああなるほど、子ども達は普段の生活の中で自然に習得されてきたなっていうのは感じます。逆に子ども達に教えられることが多いですね。

教諭 B：家庭訪問でも、お家の電気をバンバン消していつていますよ、って。子ども達のほうがすごく意識が高くて、私も教えられていますよってお母さんが言っていました。

教諭 A：普通に学級でも、使い終わった後とか、余ったプリントをみんな裏紙として普段の生活の中で使っています。子ども達のほうがもう。

島袋：他の授業についても、環境教育、NPO の方々と接触したり、いろんな新しいやり方を試

みたことが、他の、例えば国語の授業でもいいですし、他の何かの授業についても、例えばこういった子どもの自主性を育てるように意識が変わってきて、あるいは授業方法が変わってきたとか、そういうふうな波及効果っていうのは何かありますか

教諭 A: 社会科の教科以外ではね、NPO の方に入っていたことはないんですけど、現場を見ている方は、教科書に書かれているものよりも、現場の実情がよく分かるので、生の声として伝わるので、教科書でゴミの写真見てごらんっていうよりも、現場の方が撮ってきた写真とかお話を聞くと、子ども達にすごく伝わるし、私達にも実情はもっと深刻なんだっていうふうに感じることができる。やっぱり頭で勉強したものと現場に携わっている人達の教え方っていうのは、リアルだなって思って、そこは学びが大きいですね。

島袋: 参加型学習、体験型学習っていうのが、今とても効果があるっていうことで。

教諭 A: 他の学校では、この買い物ゲームを NPO の方が子ども達にやっています。だけど、この学校は、これは教師のフィルター通して教えることが大事だっていう校長先生の考えがあって。私も去年初めてやって、すごく抵抗があって、こんなふうにはできないと思っていたのですが、やっぱり自分がやってみて良かったなと思います。すごく自分の力になったというか、力がついてないかもしれないんですけど。なるほどね、こういう 1 つの授業の方法みたいな感じを学びました。

島袋: だから、かなり違いますよね。今までの知識を自分が持っていて、それを生徒に教えていくっていうやり方と、グループ学習を中心に子ども達に自律した「学び」を自分達でつくらせていくっていう方法と、それを支援するっていう。かなりやり方が違いますよね。これは、やはり宇栄原小学校の先生方はすべてこのハードルっていうんですか、それを跳び越えて自分を変えていっているっていう状況があるんですか。

教諭 A.B: あるかもしれないです。

島袋: ありました。同じようにされた時どんな感じでしたか。

教諭 B: 私は今度初めて 4 年生になったので。

島袋: これからですか。

教諭 B: これからで、とてもドキドキしています。話がきてからはどうしようと思ってドキドキしていました。

大宜見: 転入されてきたんですか。

教諭 B：去年は3年生で、そのまま一緒に進級した感じですね。

島袋：様子はちょっと聞いてはいるわけですね。

教諭 B：はい、様子は聞いていますが、学年で総合学習の内容が違うので、同じ環境教育といってもやっぱり学年でいろいろ NPO さんの関わり方も違うんだなっていう。それで、4年生の内容はすごく生活に密着している、これから先もずっとついて離れないような内容なので、だから去年よりもくいつきがいいっていうか。

島袋（裕）：生徒ですか。

教諭 B：見て、実情を見ている分、何かすごく興味があるように感じるなっていうのは、学年みている面では、すごく変化の大きさは感じます。

教諭 A：倉敷ダムに遠足で行った時も、わざとバスガイドになって、倉敷ダムに着くまでの間、沖縄市、うるま市の最終処分場をわざと通しながら説明したり、遠足ですが、やっぱりそのついでというか、少しずつ種まきというか。見てごらん、これ何だと思う、とか言ってる。そういう話をして、ちょっとずつ意識しながら私達もここにもっていくぞ、みたいな感じで。

大宜見：去年は無かったんですか。今年の遠足からですか。

教諭 A：去年も同じように、同じ場所に行ったので、子ども達には、学習するために、総合学習ではテストがないので、代わりにワークシートに、その時の授業の感想を書かせたりするんですね。そしたらやっぱり、テストでは見えないような子ども達の関心とか、意欲とかものすごくこのワークシート通して感じていることが分かるし、他の子ども達が、他の授業受けているような感想と違って、この買い物ゲームやいろんなゴミの実践のワークシート見ると、かなり子ども達が深く考えて受け止めているのが、すごく分かりますね。

島袋：実をいうとワークショップ型の授業を何回も大学で最近多用してやっているんですけども、評価が、僕は政治学が専門ですけど、例えば政治学概論とか、決まりきった授業だったら、その知識の量を問うとか、あるいは正解を問うっていうことで、点数つけやすいのですが、ワークショップ型あるいはグループ学習型の授業って点数つけられないですよね、一人一人の意見が重要なので、それに成績をつけることができないというのが大原則なんですよね。総合学習は、環境教育の成績に関してはどのようにつけるんですか。

教諭 A：「よい子のあゆみ（通知表）」で、この子の活動、所見を書くんですよ。その所見自体が評価ではないので、こんな活動を頑張っていたとか、こんなことができるようになったとか、その子自身の変化をワークシートから捉えて、こういうふう気づけたとか、総合学習として評価がない分、伸び伸びというか、少し気楽にできますね。

島袋（裕）：教諭A先生が、NPOの方が来て授業をすることで、生の声というか、専門性というのはたぶんNPOが入ってくることでのメリットだと思うんですけど、逆にNPOと一緒に授業されていくってことで何かデメリットというか、課題は何かありますか。

教諭A：この形自体には、デメリットはないんですけど、さっき話したシナリオを教師がやる時に、自分達がある程度目標とかそういうのをもって、この通りにやるわけにはいかないとすごく感じていますね。デメリットじゃないんですけど、やっぱり教育者としてやらなきゃいけないことってというのはあるなって感じていて。

島袋（裕）：変えていかなければいけない課題ですか。

教諭A：そうですね。フィルターを通す自分達の力をちゃんとつけていかないといけないかな、っていうのがあって。何でも、こう横に流していくのではなくて、ちゃんと受け止めて自分達のフィルター通してやっていくための、自分達の力をつけていかなければいけないですね。大学では何か、環境についてどんなふうに今考えているんですか。

島袋：僕は教育学部に自然環境教育コースっていうのがあって、そこが「環境教育学」っていう科目を設定されていたんですけど、一回も開講したことがないってことで。それで、特に社会系の先生にやってほしいっていう授業だったらしいです。社会系の先生がそっぽを向いて知らんぷりしていたので、それでしょうがないから私が引き受けますっていうことで。だけど、私が環境教育について授業を教えることができないんで、横山先生に相談して、宇栄原小学校の環境教育について、紹介するだけでも価値あるんじゃないですかっていうことで、お願いしました。宇栄原小学校の特徴は、民間出身の校長とNPOの方々が授業を担当されているっていうことだという話になって、横山先生とそのNPOの方々がどういう授業をされているのかっていうことを話してもらいましょう、っていうことで、やっています。だから、環境教育とは何か、その中から自分達なりに環境教育とは何かっていうことを考えて下さいねと、学生の自主性を重んじる授業なんです。

教諭A：一緒ですね。

島袋：近いものがありますね。

教諭A：各学年の実践を聞いて、それを紹介していくっていう形ですね。

島袋：はい、それで那覇市全体あるいは沖縄全体でこういった取り組みがもっと普及してほしいなっていう思いがあります。この授業が、横に広がっていく。それから時間的にも、未来にも広がっていくためには、どういう課題があるのかっていうことを、考えて検討して、それでいろいろ質問したりもしながら報告書をつくれば、他のいろんな学校もそれを見ながら取り組めないか

なっていることを思っています。横山先生にも話して報告書をつくらうってことで、やっています。そういう状況ですね。だから琉大のほうも全部試行錯誤しながら、新しいタイプの教育なので、教育内容もそうですけど、方法も全部新しいタイプで、確定したものではないと思います。

教諭A：そうですね。でも本当に、自然環境がどんどん壊れていく一方なんで、本当はもっと目を向けないといけない、私達も子ども達に目を向けさせてあげないといけない分野だな、って感じます。だからまずは教科で、そこから広げていくみたいな感じで小学校のほうは、やっていくのも大事かなって。

島袋：あと重要なのは、子どもの自主性を育てるってということで、子どもが社会を変える力をもてると。横山先生が言う、社会を変えるという小さな成功を子ども達に味わってもらおうという、スウェーデンの例をおっしゃっていたんですけど。今までは学校の規範とか、学校社会のルールだとか、学校の取り組みっていうことに関して子どもが口出しできるってことはほとんどありえなかったですよ。それが、子ども自身が先生を注意するとか。子ども自身が、こうやるべきだと、意見を言うとか、子ども自身が学校社会の規範とか、ルールとかも変えていくとか、そういった力を育てられれば実を言うと、私は政治学が専門なものですから、本当に民主主義的な、民主的な社会っていうのができるんじゃないかなというイメージですね。それでとても子どもの自主性を育てる教育っていうのが重要で、本当はそれが環境に留まらず、いろんな分野に広がっていくと、要するに本当に日本社会をよくする主体を育てていく、そういった教育に変わっていかないかなって期待しているんです。私のほうはそういう問題意識です。

教諭A：私達もその延長線上にこれが待っているっていうことをちゃんと分かってしなきゃいけないですね。ゴールを目指してちょっと種まきで、ちゃんと芽が出るようにしないと本当はいけませんね。

島袋：今日は本当に長い時間ありがとうございました。朝から押しかけてすみませんでした。